
邪神爆誕

Dombom

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神爆誕

【Nコード】

N9752W

【作者名】

Dombom

【あらすじ】

転生先は予想の斜め上。とてつもない容姿に打ちひしがれながらも頑張る転生者。頑張れ転生者、失踪するな筆者。

風呂敷に 押しつぶされず 進めよう 頑張れ筆者 処女作です

マッキノンで手いっぱいなのでこれも休みます。すいません。いずれ必ず終わらせますので。

目が覚めるとそこは洞窟だった（前書き）

つたないですがよろしく。

目が覚めるとそこは洞窟だった

目が覚めるとそこは洞窟だった。
っていうか多分洞窟だと思う。

何せほんとに真っ暗だし、なーんにも見えない。
ただゴツゴツした岩があちこち触れるから多分洞窟。

それも結構狭め。

おーい。ヘルプミー。

誰か助けてー！ここは何処ですかー？私はだれー？

もう腹黒白色宇宙生物マスコットでもいいから助けてください。
っていうか私は誰？私？俺？ボク？

・・・

ひゃっほう！わからねー！どうでも良いー！

もうね。とにかく洞窟なわけですよ洞窟。めっちゃ真っ暗。
そんでそこに記憶喪失で放り出される私こそ多分主人公なのでしょ
う！

そしてこの洞窟を抜け、明るい世界に進出し！

王様にあって！

仲間と苦楽を共にしい！

魔王をぶっ倒して！

その魔王の背後にいる邪神をパートナーたちの犠牲を払い！
血の涙を流しつつ討伐するんですね。分かります。

フフフ・・・

フハハハ！

フハーハツハハ！！！！

やってやるうじゃないか！

とにかく、まずこの洞窟を抜ければいいんだな！
そうだろう？

そうに違いない！

そう言つて少し頭が変になったボク？私？俺？あーわかんね。
名前わかんないんだよね！。

めんどい。

僕と私と俺の蝶！融合！ボーグワタシヨレにしよう！

そんなわけで私ことキングインペリアルカイザー？世の伝説が始まったのである！

え？名前が違う？そんな馬鹿な。ボーグワタシヨレなんてダサイ名前つけるわけないじゃん。

きっと邪神はダークネスカガセオエルストファスとかいう厨二ネームなんだからそれに釣りあうような名前にしないとな。

ふふふ。

あまりの唐突な、いきなり記憶喪失で洞窟に放り込まれたからおかしくなっていたのかもしれない。

いや、多分というか絶対おかしくなってたな。

だって結構進んで来たし・・・匍匐前進で。

この洞窟狭いな・・・

まあ、いいだろう。

それよりもこういうRPG的な状況に放り込まれた時、皆どうする？どう見てもここは始まりの洞窟的な名前のダンジョンだね。

つまり、どこかに隠し扉があって、初心者救済アイテムとかがある可能性が高い。というかあるに違いない。

そしてこの場合、その場所は大概・・・目覚めた場所若しくはその周囲！

せっかく進んできたのはちょっともったいないが仕方がない。アイテム取得率100%のためだ。

そう一人でぶつぶつ言いながら進んできた道をマツハで戻る。

おお、匍匐前進にも慣れてきたぞ！

鍾乳石と石筍を吹き飛ばすような勢いで進む私ことキングインペリ

アルカイザー？世！

その行く手を阻むものは例え石ころでも容赦はせぬ。

フハハハ！

だめだ。またテンションおかしくなってきた。
とりあえず目が覚めたところに戻る。

怪しい。

明らかに怪しい。

目覚めた場所に帰ってみると他のところは岩剥き出しなのにここだけ四方つるつとしてる。

しかも袋小路。行き止まり。洞窟の終着点。

・・・甘いな。

ここに何かあるって言うてるようなもんだぜ！

食らえ！必殺！全方位「しらべる」コマンド！

オラオラオラオラ！

ドドドドという地響きを立てて俺の拳が壁を叩いている。

さすがファンタジー！俺でもスタプラ張りのパンチが打てるぜ！

ファンタジー世界のご都合主義に感謝しながらも俺は四方の壁をノックしていく。

「ポコン！」

お？・・・

同じところをもう一度殴ってみる。

「ポコッ」

・・・ニヤニヤ。

他の場所はドコドコという固い音がするのにここだけやけに軽い。
まるで向こう側に空気があるように。

うふふふ。うれしさがにじみ出てしまうぜ。

そういう感じでいっちゃいますか！

食らえ！シューティングバスター！と心の中で叫んで、怪しい壁へと渾身の一撃。

「ピシリ！」

と音を立てて目の前のつるつるした壁に輝が入り、広がって

そして・・・砕け落ちた。

うおおおおおおおおおおおおおおおおおお

ああああああああああああああああああああ

・・・すぐくまぶしいです。

いやーびっくりした。バルスを食らった大佐の気持ちがよくわかつ

た。

それにしても、ふう・・・

隠し部屋どころか外に出ちゃったよ。

っていうか外というよりも・・・

隠しプライベートビーチ？

こうなんというか、南国のでかい岩の島の真ん中を円形にくりぬいて、

切り立った崖で出来た円の内側に切り取られた砂浜と湖がある。そんな感じ。

湖は、もしかしたらここは島で周りの海とつながっているのかもしれないから

正確には海なのかもしれないけど、すごく深く、引き込まれるような群青色。

ああ。思わずため息が出るよ。美しいな。

美しいで思い出した。俺の容姿はどうなってるんだろ？

外に出てみたはいいものの、全力匍匐前進の弊害か、立ち上がれないし首も回らない。

日差しも燦々として気持ちいいし、飛び込んで水中から水面を見れば光の反射で

私ことキングインペリアルカイザー？世の雄姿が見られるに違いない。

ついでに汚れも取れそうだ。

っていうか飛び込みたい！

ヒヤッほーい！と飛び込んで、バシャバシャと水しぶきを上げる。
わーいわーい。ふう・・・やはり気持ちいいな。

さて、と。潜って水面に反射する我が姿を見ようではないか。

ザボン。と音を立ててもぐる。

目を開けて泳いでいるのに全然痛くない。

きつと神様の加護を受けてるからなんだね。

そんな私の容姿は金髪碧眼色白足長高身長イケメンに違いない！
ふふふ。よろしい！ならば振り返ろうではないか！栄光の明日のため！

そうして振り返った水面に映っていたのは

邪神ことダークネスカガセオエルストファスでした。

目が覚めるとそこは洞窟だった（後書き）

48の邪神技その1「全方位しらべるコマンド」を覚えた！
48の邪神技その2「シューティングバスター」を覚えた！

ほんとにほんとにほんとに邪神だった（前書き）

しばらく探検には出かけません。ご容赦を。

ほんとにほんとにほんとに邪神だった

どうしてこうなった・・・

いや、分かっていたのかもしれない。

タイトルからして邪神曝誕だし・・・

振り返った俺が見たもの。

美しい水面に映っていたのは醜い邪神。

一言でいえばものっそいでかい。

比べられるものがないので何とも言えないが、岩肌とかから判断すると、

多分人間の感覚でいうと直径数百メートルのこの湖がちょっとした池ぐらいに感じるぐらいでかい。

そして、なんとというか残念なお知らせである。

金髪碧眼色白足長高身長イケメンなどでは全くなく、

なんか青白いうねうねした脳みそ的なのに、イ力的な触手がこれでもかっていうぐらい生えてる。

そして絶え間なくうねうねしてる。

極めつけは顔。

なんかこういまにも「キシヤー！」って言いそうなヒトデみたいな口に、

かなり離れた位置にある金色の光彩のキラキラしたむき出しの眼球。もちろん血走っています。なんかビーム出そう。

わあー素晴らしいほど厨二的で禍々しい。クトウル。神話の旧支配者のな？

禍々しさを絵にかいたような容姿。

悪魔も泣き出すデビルメイクライな容姿に浜辺に上がった私はない膝を抱えて日陰でシクシク。
いくらなんでもひどすぎる。

異世界転生と言えは勇者とか実は最強なんだけど力を出してないんだぜとか

封印されてたロリ聖女に憑依とかだろおおおおおおおおおおおおおおお！

っていうかわわり種でもドラゴン、最悪でもゴブリンがボーダーライン。

うねうね触手スプラッタモンスター 邪神ちゃん！なんてお呼びじやねー。

しくしく。

うおおおおおおお（泣）

はあー

こうなったら世界征服でもするか。

とか開きなおって、ぼーっと湖を見つめる。

相変わらず湖は何事もなかったかのように深く、青い。

そして周りの数百メートルはある高さの岩壁から降り注ぐ日差しは

湖と相まって素晴らしい。

まあ、私がぶち抜いた壁の穴がでかい口を開けているが。

・・・

なんだかなー

もしかしてこの世界この邪神スタイルがスタンダードなんじゃないの？とか、

この世界にとつたらこの触手お化けも所詮海月ぐらいの脅威でしかないんじゃないのか？とか、

容姿とか別にいいじゃん。強く生きていこう。とか
っていうか邪神がうじゃうじゃいたら正直怖いなとか、

空の抜けるような青さもこの荒んだ私の心をいやしてくれる。

転生先が果てしなくグロテクな姿でも、強く生きていこうと思った私であった。

ほんとにほんとにほんとに邪神だった（後書き）

48の邪神技その3「邪神になったりしたけれど、私は元気です」
を覚えた！

邪神って何ができるんさ？（前書き）

1日1話できたらいいな。

分かったこと。

どうやら魔法、超能力の類は使えないらしい。

もうね。「メラ」から「はかいこうせん」まで思いつく限りやってみただけであれだね。

うん。さっぱり。

あれだけビームでそうといった目からはやはり何も出なかった。

気合入れすぎたのかめめめめした体の表面がやや青白く光ったぐらい。

自分でいうのもなんだけどキモす。

はー。。

きつとステータス欄にはM P - 0とかS P - 0とか描かれているんだよ。不思議能力適正皆無だよ。

精神統一してみても気や魔力のかけらも感じない。

その代りと言っては何だけど、身体能力はやたらと高い。

っていうか触手の1本1本がかなり強烈。

体のでかさと相まって本気の正拳突きとかやると衝撃波が出たよ！
適当に振り回しただけでも達人の鞭が音速を超えるように「パァン！」ってなった時は感動したね。

ちよつと衝撃で指先？がビリビリしたけど。なるほど岩盤ぶち抜けるわけだ。

それに先端は鉄みたいに金属光沢を放ってるし、もう指銃とか余裕？

北斗百烈指銃とか南斗百烈爆星波とかできちゃう。

後、ちからも強い。何本あるのかわかんないぐらい多い触手だけど、たった20本でやたらとでかい体を支えられたし、バランス感覚に慣れれば10本ぐらいで立てそうだ。

えらくきめ細かく動くし、スピードも申し分ない。

王蟲みたいに触手を使って全力で走ったら、結構距離あるはずの湖の回りでも、ほんとあつという間に一周出来た。

感動してウサイン・ボルトの真似しちゃったからね。両手を上げてゴールする邪神的な私。

さらにお得なのがこの触手！なんとただのイカ味かと思えばさっぱりした魚介っぽい霜降り肉のような味わい！

え？

食ったのかって？

もちろん食べましたとも。

本音を言えばあまりにも多くてうっとおしいので少し減らそうと思った時に、ついでに味も見ておこうと思ったわけよ。

即死級の毒が入ってたらずこで終わりだけど、これだけでかい邪神ボディだったら濃度的に大丈夫・・・多分。

何だかこの体になってから水飲むぐらいでお腹は空かないんだけど、この体の味覚とか気になるじゃん？

だってあれだよ。そもそも味覚つてのは生物の進化の過程で洗練された生存機構の1つなんだよ！

その正体は、体にとっていいものをうまいと感じ、対して、有害なものをまずいと感じさせる高度な選別機能！

つまり、生物によって必要なものが変わる以上、味覚も変わるはずなんだ。

多分吸血鬼は血がものつそういうまいと感じるんだろうね。

それはともかく・・・

まあ、分からないでもないけどさ、自分の体がうまいってどういうことよ？

これあれじゃん。共食いフラグじゃん？

「同族を見たら霜降り肉と思え。」

やべえww食われる。

そんなことを気にしつつ、食べた後を見たらゲームみたいに切り口から次のがズリユ！って

生えてきたときは流石にビビったね。

しかも何回やつてもすぐ再生するから、万が一ともぐわれても死にはしない。・・・と思う。おそらくは。

水飲んでるだけなのに不思議。

あとは呼吸だね。

なんかサメの鰓っぱいのがついてるなー、息するとき空気が通ってるし、水の中でも息できんじゃないかね？って思ってたらできました。

水の中でもすーいすい。苦しくなーい。

でも、上がった時が大変だったね。

なんていうかこう・・・肺？鰓？の中が水浸しで辛いなんのつて吐きださないと息できないけど、そもそも水のせいで息ができない。苦しい。マジで水責め。

エヴァパイロットはすごいと思ったよ。よくあんな苦しいのに毎回耐えられるな。

まあ、走って泳げる邪神だったわけですよ。私は。

邪神って何ができるんさ？（後書き）

48の邪神技その4「天斗邪神拳」を覚えた！
48の邪神技その5「気合発光」を覚えた！

探検するならまず近場から（前書き）

更新ペースを落とすかもしれない。

探検するならまず近場から

「さて・・・」

と、気を取り直して。

探索しますか。

そういえば、最初は隠しアイテム探すために岩盤ぶち抜いたんだっ
たなー

と思い出す。

私の前には青い湖？的な。深い深い水たまり。

しょっぱくはなかったけど、味覚が人間と同じ保証はないから海で
ないかは何とも言えない。

まあ、とりあえず底まで潜ってみるか。水圧試験にもなるし。

と、軽い気持ちで水に飛び込む。

・・・

やっぱ深いなー。

もう暗くて底が見えん。

ふふふ・・・

こんなこともあるのかと！

食らえ48の邪神技！必殺！気合発光！

ばやーっと周りが青白く照らされる。

おー便利。キモイけどw w プチ宇宙遊泳気分。
重力にひかれるままゆっくりと降下してゆく。
いやー、体でかいとどれくらい潜ってるのかわからんね。
とりあえず水圧とかは大丈夫っぽい。

でも気になるのが酸素。

これだけ深いところにちゃんと酸素はあるんだろうか？
っていうか今の体は酸素を必要としているのだろうか？
はなはだ疑問。

まあそれは置いて、この竖穴湖。ところどころ亀裂が走って
いてそこに水が漏れ出ているらしい。水漏れしているってことはここ
から水が補充されているのか？

ていうか今の俺の目って水の流れが見えるのか・・・どんどん化け
物の階段を（おっとそこまでだ！

流体の流れが見えるのか・・・これは上に戻った時に空気でも試し
てみないといけないな。

意識すると、見えないものっていうか普段生物的に無視するように
出来ているはずの、

水の流れとか空気の揺らぎが見えるのかもしれん。

そうこうしているうちに、落下速度が落ちだしてきた。

どうやら底から水が湧いてるらしいね。

擬音語にしたら「ぽふん」って感じの音を立てて底に着陸。

セルフ深海探査船。

隊長！目の前に巨大な丸石を発見したであります！

目の前にはでかい丸い石。

湧き出す水の底にすぽっと栓のように嵌りこむ真球。

「あー」と旧世界知識を取り出す。

これ所謂「ドラゴンボール」ってやつだ。

やわらかい岩盤の上に固い岩を置いておくと、風雨にさらされ長い年月の間に岩盤は円筒形に削られ岩は球形になるという。

どうやら途方もない年月をかけて岩が岩盤を掘り進んだ結果、水脈まで掘り当てたらしい。

Oh! That's 自然の神秘!

なんかこの岩には神聖な感じがする。真っ白だし。

・・・ダイヤだったりして。

「You 磨いちゃいなよ!」By 脳内ラッパー

触手で丁寧に表面を磨いてゆく。

ごしごし・・・。

・・・

なんていうか、すごくピカピカです。

なんか水中なのにとしたら屈折率があるんですけどこの石（汗）ガラスとかだと屈折率が水に近いから水中に置くと見えなくなるんだけど、

この岩はなぜかよく見える。存在感バリバリ。
俺の青い燐光を浴びてキラッキラしてる。

・・・やべえwwマジでダイヤかも（汗）

まあこれだけでかく、深いところにあるから誰も取りに来ないだろ。
外したら湧水がひどいことになりそうだし。

っていうかちよっと持ち上げたらすごい水圧で水が噴き出してきて
後悔した。

何か反応あるかなと思って岩を回したりしても何も発動しない。

一通り遊ん・・・調べて満足したから元のように戻しておく。

少し離れて眺めてみたけど、磨きがかかった岩は濁りなくホントに
ダイヤみたいで・・・

ダイヤだったら大変なことだ（汗）何せ今の体だったら小石みたいな
ダイヤが地球最大なんだから。きっとジルコニアとかだろ。よく
知らないけど。

それにしてもなんかこの岩ご神体っぽいよねー。邪神が言うのもな
んだけど。

せっかく来たからと周りの岩盤に「全方位しらべる」をやってみた
けど、何にもなさげ。

特に異常はない。何かあるとしたらキーアイテムとかが必要かな？

とりあえず周りの岩盤に「コノイワフレルベカラス Don't
touch this rock. By 邪神」って彫っておく。
ついでに棒人間が円い岩を持ち上げようとしている様子に禁止マー
クを付けた絵も彫っておく。

これで異世界でも大体の意味は分かるっしょ。

まあ、かく言う私はべたべた触ってたわけですが、まあ邪神（自称）だし大丈夫。免罪権持ち。

すいーっと地上に戻ってきて、改良した呼吸法でピューツと肺から水を抜いていく。

目を凝らして空気を見ると、風の流が見えてしまった。

ナウシカ先生、風使いになれそうです。

水底で彫刻に目覚めた私はここに来るときぶち抜いてきた岩盤を削って鳥居みたいなを作っておく。

お次とばかりに、入口の反対側には簡易の社っぽい構造物を彫る。

うむ。これで鳥居、本殿、ご神体の3拍子がそろった邪神神宮の完成だ！

はっはっはー！

意外と建築向きかもなーこの体とか思う今日この頃。

日が沈んできたのもう寝よう。体は眠くはないけど、精神的に疲れた。

そんなこんなで意外と有意義な1日だった。目覚めた場所から全然離れてないけど。

探検するならまず近場から（後書き）

48の邪神技その6「ナウシカ・アイ」を覚えた！

48の邪神技その7「改良型水陸両用呼吸法」を覚えた！

48の邪神技その8「邪神彫刻建築術」を覚えた！

異世界は丸かった

・・・一晩明けて、

夢落ちでしたの方がいいよ・・・

こう・・・ね。

いや、分かってるよ。分かってるけどさー、いやマジでわかってるんだよ？

今きつとら話ぐらいでしょ？

さあ！これから盛り上がるうってところだっていうのは分かってるけどさー

あー帰りたいよー！邪神いやだよーうわぁん！

というわけで、目が覚めても邪神でした。

体の方はすこぶる快調。心の方は重度のホームシック。

だつてさ？無理じゃね？

いきなり異世界か異星か異文明か何だか知らないけど、日本で多分引きこもってたであろうと思われる私がさ、

いきなり邪神として生きていけ。ついでに記憶も奪ってやろう！

とか・・・こんな状態で冷静な精神状態を保つとか無理じゃね？

大体の異世界ってさ、日本よりひどいじゃん。

神がいるならぶち殺してー、いや、私の性格なら土下座してでも戻してもらうか？

あーミレーユいねーかなー、メタルキングにばくれつけんして、わたぼうに元の世界に戻してもらおう。
うん。そうしよう。

ふう・・・でも、今の体で戻ったら確実に自衛隊にフルボッコにされるな。

まあ、いいや。48の邪神技その3「邪神になったりしたけれど、私は元気です」を使おう。

・・・

・・・復活できねー。って言うか無理。超無理。まず触手からして無理。

とりあえず。空を見て、湖を見て、深呼吸して、無数の触手を準備体操する。

湖の周りを駆け回り、走ってるうちにだんだんなんか楽しくなってきた、

気づいたら湖の上を走っていた。

もう突っ込むのもあきらめてそのまま崖を駆け上がる。

ドコドコドコドコー！

・・・

・・・

もう、何も言うまい。

というわけで湖を囲っている崖の上までやってきました。

邪神まじばねえww

数百メートルの垂直の壁でも一瞬で登りきるとか。

そういえば最初のころ洞窟を爆走してたもんなーと、しみじみ思う。そんで、今見ているのが崖の頂上からの景色。

なんかなー。一言でいえば・・・壮大なカルデラ？クレーター？

島かなんかだろうと思っていた泉の地は、山の頂上でした。カルデラorクレーターの中心の。

これは軽く5000メートルはありそうだな。1万行ってるのかも知れん。

っていうか高すぎてぶっちゃけよくわからん。やたらと空がきれいなわけだ。

この山、周りがほとんど垂直の崖っていうか、塔みたいな形をしている。

まあそれは感覚的なもので実際の仰角は60度ぐらいなのかもしれないが、

それでも覗きこめば下が見える。

・・・ごめんウソ。なんかかすんでて下とかよく見えない。

高すぎるのもあるけど、所々湖の亀裂からつながっているらしい所から水が噴き出て滝みたいになってる。

そしてその滝は途中で霧みたいになって地上には届かない。そんな

感じ。

もうね、邪神だからこんな非常識な光景許せるけど、あれだよ？
高所恐怖症の人だとショックで心停止するね。おいしい触手10本
賭けてもいい。

真下からだんだん角度を上げていくとほとんど地平線みたいなところ
にやっと土地らしいものが見えてくる。

そしてその先には、この山と同じくらい高い山が壁みたいに360
度取り囲んでいる。

海っぱいのも見えるなー。なるほど盆地だわ。こりゃ。

いや、355度っていうから度分ぐらいの山が切り取られたみたい
になってるな。

ちなみに切り取られたところはでかい街があるみたいだ。

はぁー、もうこの邪神EYES、望遠鏡並じゃね？ハッブル先生も
びっくりだよ。

・・・あれ、まだ俺大分下向いてね？地平線って目線の高さから見
るもんだよな？

改めて目線を水平にすると・・・自分の目線の高さには宇宙がある。

Oh・・・

地球は丸かった BY邪神

フツ！壮大だな！

気を取り直して、周りを観察するためにトコトコと？ネチヨネチヨ

？グリヨグリヨ？と触手を効率よく使って、
立てたトイレットペーパー？いや、高さにサランラップの芯？み
たいな山の円状の頂上を歩いていく。

ここは円状の台地になっていて、湖側と大地側の幅は1キロちょ
いぐらいか？と、空と大地を見ながらうろつる。

そしたら登ってきたところの反対側、ちょうど洞窟があつた方の山
肌が、

かじられたバウムクーヘンのように何ていうか、吹っ飛んでいた？
吹っ飛んだようになっていた。

頂上から見るとそこだけ歩けるところが少し狭くなっていて、崖ま
で行って覗くと、

ナイフかなんかで削られたような、型抜き機で抜かれたようにスコ
ーンと比喻なしの90度の崖。

そして今覗いている頂上のちょっと下、高さに湖側の出口の反対
側っぽいところに

最初目覚めた洞窟の出口らしい所がぽっかり空中に口を開けている。

・・・

なんか背中を冷たい水滴が流れているんだが・・・

あれか？

あれなのか？

初日のあのテンションで洞窟を駆け抜けたら地獄へ一直線ってか？

・・・

やだよの世界。

確実に殺しにかかってるよ。いきなり初見殺しだよ！

まあ、あのときは体になれてないせいかなんまり速度は出なかったみたいだから、

崖の手前でぎりぎり止まれたかも知れんが、今思うとぞっとする。

初日に目覚めたところへ戻ってみても結局アイテムは見つからなかったけど、

あの時出口に向かって突っ走らなくてよかった。

どうやら正規ルートじゃないみたいだけど、比較的緩いところを探して慎重に下山しようと思う

っていうか正規ルートが地獄へ一直線の崖ってどういうことよ？と内心突っ込む

私こと邪神でした。

異世界は丸かった（後書き）

48の邪神技その11「チキンプレイ用意周到」を覚えた！
48の邪神技その12「投擲必中」を覚えた！

邪神ツーリズム

はー・・・

最近ため息ばかりついてるけど、今はこの壮大な自然圧倒され、そこで平然と活動する自身に驚愕してるわけですよ。

なにせ、果てしなく高い山の頂上で平気に活動してますからね？この邪神ボデー。

気圧とかどうなってるの？高水圧にも耐えられるみたいだし、私の呼吸ってどうなってるんだろ？ほんとに酸素吸ってるわけじゃない。さそうだ。

それに、山頂の湖もあまりの気圧の低さに低温で沸騰とかしてもおかしくないはず。

でも特に湯気が立ったりしてるわけでもないし、凍ったりもしてない。

もうわけわからん。

まあ今は、そんなこと愚痴りながら今は下山に備えてるんですよ。

え？展開が遅い？

知るか！

どんなRPGでも一歩進むごとにAボタンを連打する私の辞書には「スピードクリア」なる文言は存在しない。

常に全力警戒。備えあれば憂いなし。

それに、初見殺しの大空ダイヴトラップを平気で仕掛けてくる世界だ。慎重すぎて何が悪い。

そついうわけで、今は湖側の崖を練習台にして、ほぼ垂直の壁を駆け下りる訓練をしているのですよ。

こう、スキーみたいにジグザグに降りたり、触手^てを広げて空気抵抗を増したりいろいろ工夫している。

今の体は身体能力が邪神級なので、呑みこみも早い。

あれ？1万メートルからの落下にも耐えられるんじゃないかな？とか思ったけど、

生兵法は怪我の元。できる限りのチキンプレイで行きます。

そんなこんなで現在は壁を削っております。

え？なぜかって？

それは今現在水筒を作っているからでございますよ。

目覚めて2日目。

今までというか、それほどでもないけど、この体はお腹が空くことがなく、

（将来的に突然飢餓感が来る可能性もあるが）

湖の水だけで凌いできたわけだ。

けれど、今一歩引いて考えてみる。

当たり前のように飲んでいるこの水、この湖の水は「普通の水か？」と聞かれれば、

答えることができない。

そこら辺の水とこの湖の水は同じなのだろうか？

っていうかこの湖の水は私の知るH2Oなのか？

今の邪神ボデイはこの水なしでは生きられない設定とかだとすごく困る。

下山してみたものの、実は湖水しか飲めない私は、力を失い、山にも戻ることができず、

干からびていく運命とかいやすぎる。

ホントのところ、遠足〃水筒っていう条件反射が原因だったりする。

そういうわけで今は水筒を作るべく大岩を削りだしております。

まあ、48の邪神技その8「邪神彫刻建築術」にかかれば水筒（蓋つき）を削りだすことなどたやすい。

邪神ばねえww

気圧差でこの謎の湖水が変性したりする可能性とかも考えて、蓋を作っておく。

ここで水を入れて蓋を閉めれば、下に降りたときには気圧差でびったり閉まるという寸法。

ふふふ・・・私ってば天才ね！

そして私は計画を立てる。題して「2泊5日下界ツアー」！

崖の上り下りの練習で、どれだけの速さでどこまで登り降りできるかを掴んだ私は、

この断崖絶壁の山の高さを余裕をもって2万メートルとしても2日あれば登り切れると踏んだのだ。

まあ、下界とここは環境が全く異なるだろうから、休み休み行くとしても3日もあれば充分だろう。

流石邪神！身体能力に関してはサイヤ人並かも知れん。

え？下で暮らさないのかつて？

そんな馬鹿なことするわけがないじゃないか。

急激な環境の変化に体が耐え切れず、体調不良になるに違いない！
だから、小旅行を繰り返すことで下界の環境に体を馴染ませ、慣れたところ（1か月後を予定）に

本格的に下界探索をしようというのだ。

どや？完璧やる？

（この判断に引きこもり精神がかなり強く影響しているのを私は気付いていない。）

そういうわけで、出立は明朝日の出とともにっていうか、起きて体操した後と決めた私は、

いろいろ暇つぶしを考えた末、夜まで水筒作るときに出てきた余分な石を湖の対岸に描いた的に向けて投げていた。

いやー、良く当たる良く当たる。

投げた小石（人レベルで考えたら大岩か？）は的に吸い込まれるように飛んで行って、

その速度のせいか、当たったら爆発四散する。

投げる時にどうも音速超えてるっぽいし、もはや兵器レベルだな。

調子に乗って100個同時に投げたら、ドドン！って不吉な音がした後、

着弾の煙でしばらく煙たかった。

きれいな湖の表面も粉っぽいし、あとで掃除だなーとしみじみ思っていたら、

煙が晴れて、的の中央は大きく陥没していた。
明らかにやりすぎた。

日も沈んで来たし、湖の表面に広がった粉を取り除いた私はすやす
や眠るのです。

っていうか別に寝なくても大丈夫っぽいんだけどな！

邪神ツーリズム（後書き）

48の邪神技その11「チキンプレイ用意周到」を覚えた！
48の邪神技その12「投擲必中」を覚えた！

山登りは下山の方が危険なんだよ。(前書き)

最終話までのプロットはできてるんです。描き切る精神力と実力が
ないだけです。

山登りは下山の時の方が危険なんだよ。

ちゃぽんと水を掬い上げ、顔を洗う。

ふう、いい朝だ。

さわやかな日差しが差し込んできている。

下山するにはいい日和だ。

邪神の体にも慣れたし、まあ地上でもうまくやっていけるだろう。

準備運動として、最初の洞窟を散歩してみたけど、崖の上から見たように出口は切り取られた崖で、

その下は果てしなく垂直な奈落への一直線だった。思わず身震いして、湖に戻ってくる。

気を取り直して水浴びをした後、自前の水筒に水を酌む。

蓋はきつちりとは閉まらないが、水分が隙間にしみこんで、何とか外れないといったところか。

まあ、下に降りたら気圧が何とかしてくれるだろう。

さて、この湖ともしばらくはお別れだ。

まあ、1週間後ぐらいには戻ってくるけどな。

助走をつけて湖側の崖を駆け上り、頂上に躍り出る。

ここの頂上はいつも雲もなくカラッとしたものだ。

雲ははるか下なのだな・・・

しかし、こんなにも高い場所にいるというのに太陽はちっとも近くならない。

まあ、当然と言えば当然なんだが。
不思議と納得いかないんだよね。

ゆっくりと頂上をわざわざ一周して、昨日見つけておいた下りやすい地点に向かう。

すう。と大きく息を吸って、吐く。

遠くまでスカツと晴れて気持ちいい。きつと出発日よりなんだろうな。

ここは年中晴れてるだろうが・・・

「よし。」

と呟いて、そろそろと崖を降りていく。

急な斜面をゆっくり降りるときには斜め下に向かってゆっくり歩くことで出来る限り傾斜を減らしていく。

大量の触手が体を支えてくれるので、滑ることはまずない。

ただ、洞窟の出口側の斜面は削れてしまっているので近づかないように切り返し切り替えし進む。

いい感じだ。これなら大丈夫だな。

どうしてこうなったあああああああ！！

途中まではうまく降りていたはずなんだが。

かなりの角度の崖を降りることは覚悟していたし、崖を上り下りす

る訓練は十分やっていた。
けど現状はと言えば・・・

参ったね！

まさか滝の下が一面銀世界だったとは！
ちよつと下りにも慣れてきたかな？と思って調子に乗ったらこれだよ。

上からじゃ滝の飛沫で見えなかったとはいえ、予想できたはずだったのに！

岩肌を降りる練習はしてたけど、雪原の上を移動するなんて思ってもみなかった。

ってというか移動するというよりも・・・

足を滑らせて異様な速度で転がりながら滑っていく邪神。

もう目が回って天地無用状態。

右も左も分らない。

うおおおお！ドドド！

もうこうなったら気合いじゃー！ドドドドド！

スキーかスノーボーが知らないけど、触手を動員するしかない！ドドドドド！

がんばれ邪神！負けるな邪神！

おッ！おしー！ドドドドドドド！

よっしゃあー！うまくいった。安定したぞ！

ドドドドドドドドドドドッ！

なんだよ？さっきから？こちら気持ちよく滑ってるのに？
ちよっと減速ついでにターンして後ろを見える。

盛大に雪崩れてるー！！！！

やべえよ。マジヤバイ。飲み込まれたら悲惨だ！

とりあえず加速じゃー！

身がかめて空気抵抗を減らし、さながらボブスレーのように山を下っていく邪神。

その姿はさながら雪崩を背負うかのような雄々しさだったという。

山登りは下山の方が危険なんだよ。(後書き)

48の邪神技その13「雪崩」を覚えた！

邪神は紳士（前書き）

これに手書き溜め終了。他のお話に移り気気味。書き切りますよ？
いつか・・・明日から本気だす

邪神は紳士

うおお・・・

ぼふつという音とともに、雪原に似つかわしくない触手が生える。

脱出成功。

いやー辛かった。まさか雪崩に巻き込まれて埋まるとは。

振り返ってみると雪に覆われてはいるが、やはり絶壁。

上を見上げても先が見えない。

はるばる遠くに来にけるものかな・・・

帰るときも注意しないとな。

せっかく上ったのに雪崩れて1からとかいやすぎる。

とりあえず、唯一の持ち物の水筒はちゃんとあるし、予想通りきちんと蓋が閉まっている。

呼吸してみても、別に何も異常はないようだ。やや濃いと感じる程度かな？

それにしても・・・

目の前に広がる森。

小さい。

邪神だから仕方がないのだろうか？

まあ、中途半端にでかくて森をなぎ倒すよりはいいのか？
あまり密生しているわけではないし、ちよつと触手を伸ばして歩けば、

普通に歩いても森を破壊して進むことにはならなさそうだ。

とりあえずできるだけ森を破壊しないように進んでいく。

あー、見渡す限り森だなー。

ふふつ。これだけの森だ。何かしら動物はいるだろう。

正直、山に上にいる時は自分以外の他の動物がいなかったらどうしようかと冷や冷やしていたけれど、

大丈夫そうだ。まあ、自分を受け入れてくれるとは限らないけど。

邪神だしなーと辺りを見渡す。後ろには邪神山、太陽は右から照らしてくれる。

森は結構広いけど、地平線の左手奥ぐらいから平原っぽくなっている。

とりあえず、そこを目指すか。

とことこと歩くついでに、木を観察したり、土を持ち上げたりしていた。

途中に小川があつたから恐る恐る水を飲んでみたけど・・・

山頂の水とあんまり変わらなかった。水筒テラ無駄ス。

傍から見ると山が移動しているように見えるかもな・・・

いくらなんでもこの邪神ボディでかすぎるだろ・・・

ぼーっとしていると目の前の森の影がかすかに動いたように見えた。

？なんだなんだ？

目を凝らしてみると確かに何かが動いているようだ。

おお・・・8話目にしてやっと別の動物と遭遇か？

と思って眺めていたら、眼下の小川に白い影が飛び出してきた。

・・・キター！！うほっいいい幼女！

飛び出してきたのは白いワンピースを着た橙色の少女。

どうやら獣っ娘のようだ。

飛び出したはいいものの、目の前の川に驚きにつんのめっている。

あっ落ちた。

バシャンという音を立てて浅瀬に倒れた少女は、川の反対側でニヤしている私には気付いていない。

っていうか大きすぎて背景と化してるのかもしれない。

ワンピースの獣っ娘はびしょ濡れになりながら川原にあがって走り出そうとしているが、

森から飛び出してきた真っ黒い影に遮られる。

野犬か？やけにでかいな。よだれもダラダラしてるし、狂犬病とか大丈夫なんだろうか？

獣っ娘が逃げ惑っていた理由はこいつにあるらしい。

さっき森の影が動いたように見えたのもこいつかな？

獣っ娘が震えているのが分かる。黒い野犬が一步踏み出すごとに、獣っ娘が川に追い詰められていく。

黒い野犬は分かっていたこのように下卑た笑みを浮かべる。

獣っ娘の片足が川に入る。驚いて一瞬川を見た獣っ娘の隙を野犬は見逃さなかった。

口を大きく開けて飛び掛かってくる野犬に、獣っ娘はしまったというかを浮かべ、

恐怖に身をすくませ、目を閉じた。

しかし、野犬の牙が届くことはない。

音速の触手を振る邪神にしてみれば、野犬の跳躍などあくびが出るほどに遅い。

獣っ娘が恐る恐る目を開けたとき、目の前の野犬は巨大な触手にとられ、空中に固定されていた。

獣っ娘が触手をたどって、こっちを振り向いてくる。

振り返った獣っ娘と、目が合った私はやっほーと、触手を掲げてみせる。

あっ・・・泡吹いて倒れちゃったよ獣っ娘・・・

野犬を殺さないようにソフトにぽいと遠くに投げ捨て、倒れた獣っ娘をつかんで、移動する。

とりあえず開けた場所かつ水場に近いところを目指そうと思う邪神であった。

邪神は紳士（後書き）

48の邪神技その14「森にやさしい歩き方」を覚えた！
48の邪神技その15「幼女を助ける」を覚えた！

右手に幼女を左手に丸太を（前書き）

今日はハリーポッターssが書きたくなったので申し訳程度です。
いや、最終話までのストーリーはあるんですけど。書くのが・・・

右手に少女を左手に丸太を

とりあえず獣っ子の少女を保護した私こと邪神は川岸を散々歩き回った拳句、自分の体格に合うぐらいに開けた土地はないという結論に達した。

「邪神ボディエ・・・でかすぎる。」

仕方がないので川岸の木を抜いては土をアームハンマーで固め、抜いてはハンマーで固めを繰り返し、ちよつとしたキャンプ場的な更地を作った。まあ、私にとってはぎりぎりの大きさですが。

引っこ抜いた木を無理やりこすり合わせて火を焚く。音速の触手にかかれば火など丸太同士をこするだけで出るわ。ははは。

とりあえず獣娘を火の近くの温度のちょうどいいところに寝かせ、自分は焚火と称するキャンプファイヤーの維持に努める。

夜になったつばいのでばけーっと空を見てたら、獣娘が起きた。

「・・・・・・・・・・」

あー何か言ってるつばい。身振り手振りからなんか

「私なんか食べてもおいしくないです!」

って言ってるんだろ。不便だ。テレパスイーとかないもんか？

獣娘を見つめ、「慌てなくても喰いやしないよー」って念じたら、なんか一瞬きよろきよろした後、こっちを向いてきた。

「あーあーメーデーメーデー。聞こえますか。聞こえたら右手上げて。」

おお、右手を挙げてくれたぞ。とりあえずこっちの話は通じるのな。向こうからこっちはどうなんだろう？

「なんか言いたいことを思いっきり念じてみて？」

獣娘は祈っている。ギークに1万ダメージ！ってなことはなく。

「・・・か・・・きこえ・・・きこえますか？聞こえますか？」

おお、行けるじゃんこの念話！

「はい。聞こえますよー。できるじゃん！やったね。」

「はい、ありがとうございます。」

おお、獣娘の念話は何か清水が流れるようで気持ちいいね。

私の方はどう聞こえてるんだろ。っていうか印象で聞こえる口調とかわわるのかも。

「私の声がどう聞こえてるか知りたいから、私の言っていることを復唱してね。分かったら左手上げて」

おお左手上げたな？

「道を歩いていたら黒い犬に君が襲われていたから助けました。」

「『我が歩みし折、闇の魔犬に汝が害されし故、我汝を助けん。』」

・・・だめだこりゃ。

「『・・・不出来なり。』 すみません。古語が多くて・・・私がうまくできないばかりに。」

「いやいいよ？怒ってないし。って言うかなその巨大生物と獣人の間で大体の意味が伝わるだけでもすごいよ。」

「ありがとうございます。」

あーなんかこの念話、便利だけど不便。話に齟齬が生じたりすると怖いなーなんかフラグだしなー。

「とりあえず、なんであそこにいたのか、あの犬は何なのか教えてくださいませんか？」

「分かりました。」

右手に幼女を左手に丸太を（後書き）

48の邪神技その16「整地技術」を覚えた！

48の邪神技その17「原初の火起こし」を覚えた！

48の邪神技その18「齟齬の多いテレパシー」を覚えた！

宗教はどうですか？巫女とかいるし

「私はライカナヴツ族の巫女。ミミーです。」

ほう、ミミーたん。いい名前だ。思わずわきわきと触手が踊る。川にうねってる触手が映ってるのが見えてあまりのキモさになえたのは内緒だ。感情が触手に出るのが分かったが、犬と違って全然萌えない。

「ライカナヴツとは？、巫女とは？」

「ライカナヴツは狼長族と同じ起源をもつ賢狼族のことで、巫女というのはこの聖域を守る女神ドウムステイ様に仕えるものです。」

なるほど、分からないことが分かった。なんかどんどん知らないワールドが増えていつて困る。

「狼長族、聖域、女神さまについて詳しくお願いします。」

「分かりました。」

狼長族は私たち賢狼族と同じく、星の命の子孫で、その長は私たちと同じく言葉を解し、その一族も高い知性と、強い肉体を持ちます。賢狼族が、知性に特化したのに対し、狼長族はすべての狼類の力を併せ持つと言われています。

次に、聖域ですが、聖域は四方を守護山々に囲まれこの星を覆う瘴気から守られた土地です。星の命という私たちの祖先を、この星を覆いつつあった瘴気から守るために女神さまが造ったとされています。

す。その際、聖域の外にいた外つ神が協力したとされていますが、詳しいことは知りません。

最後に女神さまはこの星が生まれたのち最初に生まれたとされています。その心は慈愛にあふれ、星の命の子孫を今でも見守ってくれているとされています。そして、この星の瘴気が強まった時、女神さまは再臨し、私たちを清浄な世界へ導いて下さると言われています。」

・・・わかんね。宗教話をされても困る。だって邪神だもん。きつと慈愛の女神に触手プレイを仕掛けるために生まれたんだよ。

「まあ、女神云々は分かったけど、どうしてその巫女がこんなところに？何かの儀式？さっきの犬は？」

「あ、そうでしたね。儀式・・・というのとは少し違いますが、私は聖地に向かう途中で、あの狼長族に襲われたんです。」

「聖地？って何処。っていうかあの犬は狼長族だったの？全然賢そうじゃなかったけど。」

「聖地は女神さまの眠る地です。私たちは1000年前の予言で瘴気の強まる今年に復活すると言われている女神さまを迎えるために移動していたんです。ですが・・・」

「ですが？」

何か事故でもあったのか？

「あの賢狼族は本来の姿じゃないんです。彼らは普段はすごく理性的で気高い一族なんですが、おそらく瘴気に侵されて・・・私たち

女神の巫女ならば瘴気を払うことができるんですけど、狼長族が原形の魔狼だと・・・もともと強い彼らが魔狼化してしまつては、もうどうしようもなくて。護衛のみんなは私を逃がしてくれたけど、みんなは・・・」

辛いんだろうな。予期せぬ事故で・・・さっきの犬放り出さなきゃよかったな。ミミーに瘴気を払ってもらつて話を聞いたらよかったかも知れん。

宗教はとうですか？巫女とかいるし（後書き）

48の邪神技その19「無知の知」を覚えた！

瘴気は封印だぁー！

泣き出してしまったミミーを見守るしかできない俺。

下手に触手で触ったら骨とか追ってしまいそうだ。

ぱちぱちと、火の燃える音だけが聞こえ、森に邪神の影が伸びている。

っていつかなんか静か過ぎね？

ワウオオオオオオ！

となんか背筋が寒くなる遠吠えとともに、森の中から昼間追い払ったのと同じような魔狼が十数匹ぐらいわたしと反対側から出てきた。魔狼どもはキャンプファイヤーの左右からミミーを囲むように集まっている。傍から見たら

火

魔狼 魔狼

ミミー

触手 触手

私こと邪神

ウホッミミーピンチ。これどう見ても邪神に挑みに来たミミーがトラップと待ち伏せにあって包囲されてるって感じだね。

「っ！」

と、ミミーは必死に恐怖を押し殺しているが、大丈夫だ。っていうかその恐怖を与えている原因がほぼ私のような気がするのは気のせ

いか？うぞうぞしている私の触手は図らずも魔狼どもと連携しちゃってるし。

でもこの包囲は私がミミーの味方な時点で成立してないし・・・なんか私ミミーを囷に魔狼を引き込むようにしちゃってない？いや！断じてそんなことはない！紳士はそんなことしない！

「3秒で終わらせるから安心しなよ。」

と、私は出来る限り優しくミミーを魔狼の手の届かない高さまで持ち上げる。それとともに音もなく伸びていた触手が魔狼の背後を取り、逃げ場をふさぐ。

「食らえ！触手ネット！」

ふふふ・・・まさに一網打尽wwわんこ共は触手に噛みつこうとするけど、私の触手はすぐくおおいです・・・だし、カッチカチなので、その程度では傷すらつきません。

わんこ等を、水揚げ直後の魚みたいにはしておけないのよなー。と私はシュルシュルツとワンキャン言っただ暴れる犬どもを一匹一匹触手で縛り直した。

「どうよ？」

と私はお姫様をエスコートするようにミミーを地面に下ろす。

「す、すごいです！」

ミミーたんがきらきらした目でこっちを見てくれる。いやー人間だった時もこんな目で見られたことはないね。記憶ないけどさ。

「捕まえたわんこども浄化できたりする？」

「は、はい！こんなにたくさんの人を浄化したことはありませんが、やってみます。」

あの、一人ずつここまでおろしてくれますか？」

「はいよー」

と、手近な一匹をミミーの前に拘束したまま下ろす。お、よく見ると昼間のよだれ君じゃん。

なるほど、こいつが応援を呼んできたと。

ぐるぐる唸るよだれ君が噛みつかないように顎も締め付けておく。よだれ君に近づいたミミーは両手でよだれ君の顔を挟むようにして触り、何か唱えている。すると、ミミーの体が光り始めた。

「おお、すごい。」

一方のよだれ君からは黒い靄のようなものが出てきて、輝くミミーの腕に吸い込まれていく。よだれ君は黒い体から汚れが落ちるようにだんだん白くなってくる。一方で、ミミーの手は黒く染まっている。ミミーの顔は苦痛で歪んでいる。

「おいおい！大丈夫なの？」

「っ大丈夫です。」

黒い靄を吸われ、暴れていたよだれ君は靄が抜けきると糸が切れたように気絶した。ミミーは黒くなった腕を垂らして、肩で息をしている。

一息ついて深呼吸したミミーはまた何かを唱え始め、両手をつきだ

す。その両手からさつき吸い取った靄が吹き出すが、広がらず、ミミーの両手の中でバレーボール大の黒い結晶になっていった。

「はあ、はあ・・・封印！」

ミミーが十字を切ると、金の輪っかが現れ、ギュギュギュと結晶を締め付けるように圧縮していく。黒く濁った結晶は圧縮されるに従い澄んだ青い色になっていき、最終的には金の輪っかが付いた青い宝石になった。

「できました。」

青い宝石を手にかざして誇らしげに私を見上げるミミー。

「いや、すごいけどなんか見てるこっちがハラハラするわ。ミミーは大丈夫なの？」

「はい、いけます！次の人を下ろしてください。」

ミミーは額の汗を拭き、そう答えた。

瘴気は封印だぁー！（後書き）

48の邪神技その20「一網打尽」を覚えた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9752w/>

邪神爆誕

2011年11月11日12時33分発行